

呉世宗 (LD0206)

「リズムと抒情の詩学—金時鐘『長篇詩集 新潟』の詩的言語について」要旨

1. 目的

本研究の目的は、リズムと抒情という観点から、^{きむしぢよん}金時鐘『長篇詩集 新潟』(以下、『新潟』と略記) についての一つの読みを提示することである。

本研究は、大きく二つの課題を設定している。

第一に、植民地化の一翼を担った日本の近代詩の抒情とリズムがどのように形成されたのか。これを日本近代詩の起源的な時期である明治二〇年代(一八八七～)に、「リズム」概念がどのように受容されたのか、それにより「抒情」の質に何らかの影響を及ぼしたのか、を問う形で考察している。つまり「リズム」概念の受容の観点から「抒情」を検討した。

第二に、この日本近代詩の起源における「リズム」と「抒情」の近代化と、それがもたらした結果との比較を通じて、日本語によって書かれた『新潟』の詩的言語の独自性を明らかにしていくこと。

要するに、日本から朝鮮半島に拡がる感性の空間を、金時鐘の詩を通じて問い返し、それにより彼が紡ぎだす詩的言語の独自性を明らかにしていくこと、そのような「比較」文学的な問いが本研究の探求される課題となっている

2. 概要

①本研究の理論的枠組み

本研究の第一のポイントは、一見自然なものとして見えてしまう「抒情」が、「リズム」概念の受容によって形作られたという観点から両者を論じたことである。つまり文化的な背景に光を当てることで、「リズム」と「抒情」を相対化して規定したのである。そして両者の関係性やその日本的な特性を明確な形で取り出すために、明治二〇年代に活発に交わされたリズムに関する諸議論について検討した。検討の結果、リズム概念が伝統的な音数律とは異なるものとして自立する過程で、新たな形式を見いだしていこうとする動きを引き起こし、それと連動して詩における本質的なものとしての「内面」が浮上することにもなっていた。

第二のポイントは、リズムと内面の近代化が、日清戦争という時代的背景のもと、ナショナリスティックに再編制されていったということである。すなわちリズムと内容の再編制は、日清戦争という出来事に対して働いた認識作用の結果であり、それゆえ認識自体を制約することにもなったのである。

この点に本研究の第三のポイントもある。リズムに関する議論は、島村抱月の詩論に見られたように、リズムが内容に枠を与え、内容がその表出を規定する、というように統合された。だがさらに一步踏み込んで、リズムを他者と共有することが共同体を立ち上げるものとして理論化されることで、リズムの共有化は共同体化するリズムとして定式化されるに至っていた。これは、当時勃興していたナショナリズムと、はからずも相即的だったのである。のみならずリズムの全体化が認識の全体化として、「場面」の他者性を含め呑み込むことになったのである。時枝誠記の議論においては、「場面」と言語的表現の関係は、互いに制約しあうものとなっていた。しかし結果的に「場面としてのリズム」と「融合」する言語的表現は、言語にとって外在的だとされた「場面」を呑み込むものとなっていた。その意味で時枝の議論は、明治二〇年代のリズムに関する議論の行き着いた先を、見事に理論化したものとなっていたのである。

つまり伝統的な音数律から独立したリズム概念は、「内面」を浮上させるとともに、その表出の仕方も水路付けることになったのである。そのため認識のゆがみも入り込む結果となった。構成された感性の空間が植民地にまで拡がり、近代化された抒情とリズムが心的秩序に作用するとき、コロニアルな問題が発生する。それを振れた形で現象させていたのが、金素雲訳『朝鮮詩集』（『乳色の雲』）であった。金素雲『朝鮮詩集』において問題になるのは、「こころの翻訳」という名のもとに、原詩の形を尊重せずに、端正な七五調や日本的な抒情の表現に用いられる雅語を多用したことである。その結果、『朝鮮詩集』は「朝鮮の詩心」をゆがんだ形で伝えることで、日本の詩情との類似性が強調されることとなり、植民地支配という現実を隠蔽するように作用したのである。

②金時鐘の思想的背景と『新潟』に向かう方法論的な深化

金時鐘も、金素雲『朝鮮詩集』を通じて、「朝鮮の詩心」が日本的な抒情と類似していることを「発見」し、感動した者の一人であった。近年、金時鐘は『朝鮮詩集』を再訳したが、その翻訳作品の分析によって、彼が受けとった日本的な抒情の質も明らかになった。すなわち金素雲『朝鮮詩集』が体現していたのは喪失感を感じさせる「もののははれ」であり、それゆえに過去志向的であり現実否定の抒情であった。そこから逆に浮かび上がる金時鐘の翻訳の特徴は、訳出される作品の論理を原詩以上に明確化し、さらに「心」の状態さえも対象として提示するものであった。論理の強調と「心」対象化の背後には、強固な意志が潜んでおり、それは金素雲が体現した抒情に対する明確なアンチテーゼとなっていた。この意志は、『新潟』においても中心的に働くものでもあった。

金時鐘に日本的な抒情から距離を取らせ、またそれを対象化させたものに、小野十三郎『詩論』があった。本研究では、「リズムとは批評である」という『詩論』における中心的な命題に焦点を当てて検討した。その「批評」とは、短歌的な抒情とそれを支える精神化された「自然」から逸脱しながら、言語と生活の「素朴」な結合を指向するも

のであった。そして「批評」が生活に下降することで見いだした外部を表出するものが「リズム」であった。そのため小野の言う「リズム」とは、流れていくものというよりも、物を露呈させていく働きとして規定されていた。

「リズム」は対象を生のまま露出させるものという発想が、金時鐘に日本的な抒情から距離をとらせ、また対象化させる契機となった。だが両者には〈自然〉の捉え方を巡る差異もあり、それが結果的に、「リズムとは批評である」の金時鐘における独自の受け止め方に繋がっていた。

金時鐘は、小野の「リズムとは批評である」を、〈自然〉の奪回であると解釈する。とはいえ小野の「現実を無限の遠点から眺める」、あるいは奪回という「静力学」は、自然認識の変更をせまることはあっても、金時鐘の言う「自然とはそこで生きること」という能動性はでてこないものであった。この差異は、金時鐘が日本という場で日本語に取り囲まれつつも、そこに積極的に参与し、内側から異化していこうとする思想によるものであった。そのため両者の差異は、距離に関わるものとなっていた。小野が生活を遠点から眺める、その距離を維持するのだとすれば、金時鐘は内部まで深く入り込むことで、その距離をほぼ無くなるまでに縮めていく。それにより眼に映る生活だけでなく、記憶や情念といった内面に関わることがらも、日本語の内側から露呈させようとする方法論に導くことになった。このことから「リズムとは批評である」は、「日本語への報復」という金時鐘の独自の思想に置き換えられたと言ってもよい。要するに、明治期のリズム概念が「場面」を隠蔽してしまうものであったとすれば、小野は「無限の遠点」という「距離」を、「批評」及びその結晶としての「リズム」に組み込むことで生活を露呈させた。それに対し金時鐘は、その距離をできる限り縮めることで、生活の実質だけでなく、そこで息づく感情、ひいては個々人の歴史としての記憶までも日本語を通じて顕わにしようとするのである。

しかしながら『新潟』以前の二つの詩集、『地平線』と『日本風土記』においては、小野十三郎の影響もあって、作品においては、距離が対象と自己のあいだに残されていた。『地平線』においては、時間的空間的に距離を対象化するには至らず、その結果、日本語によって創作すること以外の点でも洪允杓や村井平七の批判を惹起させることになっていた。他方『日本風土記』においては、距離が多様な角度から取上げられていた。すなわち物理的な空間、歴史的時間、朝鮮半島における南北分断、在日朝鮮人の位置、言語といった角度から距離が表現されていたのである。だが距離に対して着目されながらも、結果的には語り手と対象は絡み合うことがなかったのである。

③『長篇詩集 新潟』から見える金時鐘の抒情とリズムの詩学

金時鐘という詩人の独自性は、『新潟』において明瞭に形作られたとあってよい。とりわけ「リズム」と「抒情」という観点からすれば、以前の詩集に比べ遥かに高い水準にある表現を生み出していた。それは「距離」の捉え方の大きな変化に現れるものであ

った。

『新瀉』の主題を象徴的に示すものは〈道〉であった。道は一方で存在者を分類し規制、排除する境界線として描かれていた。金時鐘が試みていたのは、自然的なものとしてみなされている「道」を、実存を否定しない〈道〉へと転換させることであった。のみならず分類し秩序付ける道は、言語体系のメタファーでもあった。ここからすれば、〈道〉への転換は、言語体系の異化も意味していた。

その「道」から〈道〉へ至る過程に介在していたのが、「変身」という方法であった。変身に関連する多くの詩的形象が現れていたが、中心的なものは「みみず」である。この「みみず」は、何ものにもなれる「未然的なイメージ」（細見和之）としてあることで、「道」の規制力を無化してしまう横断の可能性と、逆に自らを取り巻く環境に適合してしまう危険性を同時に持つ形象として描かれていた。

そのような二重性を帯びる形象として描かれるのは、第一に、日本という場の中にある自己が、日本（語）と朝鮮（語）に対して、どちらかに適合することが他方への非適合となる、いわばダブルバインドにあることを示すためである。第二に、ダブルバインドになる自己は、「あいつ」／「ぼく」というアイデンティティの分裂だけでなく、どちらにも帰属し得ないまま剥き出された生を強いられていることを表現するためである。

その状況に対して金時鐘が描き出したのは、「道」を〈道〉へと転換させるための、「意志」的な変身の過程であった。この場合の「意志」とは、規範的な価値としての「日本」や「朝鮮」のどちらにも帰属することなく、そのはざまに留まり続けることを選択となっていた。そして、留まり続けることによって、存在を階層化する価値体系を実質的に変化させていくことであった。そのため「意志」は、逸脱することと留まるという行為によって構成される。この留まる「意志」は、一方で「蛹」という、脱皮と成虫というイメージに結びつく形象が示すように、内側から日本語を異化していこうとする試みに結実していた。それは後に金時鐘が「日本語への報復」と呼ぶものに他ならなかった。他方、留まることを「意志」することは、自らの身体を、その生理現象でさえも伺えるほどに剥き出しにすることであった。そのことは逆説的に、自らを取り巻いている世界を開示する作用も持っていた。総じて「変身」と「意志」は、「自然とはそこで生きることだ」という現実参与の思想を、方法論的にまで高めて体現したものとなっていた。この「変身」と「意志」によって、「距離」の捉え方が大きく変化することになっていた。すなわち対象と自己の間の距離が自在に変化させることができるようになっただけでなく、一連の「変身」に関する表現が示すように、両者は重なり合うことさえ可能となったのである。

この「変身」と「意志」という方法論の確立により、第一に自己自身やそれと重なり合う他なるものをミクロな観点で露呈させることが可能になっている。第二に自己を取り巻くものとしての世界とその構成に深く関わる言語をマクロな観点において対象化

することが可能となったのである。

『新潟』には多くの歴史的出来事が現れていた。植民地支配、吹田・枚方事件、北朝鮮への帰国事業、浮島丸事件、済州島四・三事件等である。本研究では、「変身」と「意志」という方法論を通じて、それらの歴史的出来事が詩的言語に現われる様を検討してきた。とりわけ「故郷」と「四・三事件」に焦点を当てて、『新潟』が歴史をどのように現象させているのかを分析してきた。

帰国運動・事業が活発化している最中に『新潟』は執筆されているが、「故郷」は植民地期、朝鮮戦争期、そして祖国としての北朝鮮という三つの観点から重層的に表現されていた。このように重層的に故郷が表現されるのは、第一に、語られるべき人々の「つぶやき」が、政治的に規定される「故郷」によって打ち消されることに対する抵抗としてであった。第二に、過去から現在までの歴史的な観点から描くことで、危機的な状況にあるほど審美的となる「故郷」の表象に対して、対象として剥き出しに露呈させるためであった。つまりミクロな観点に焦点を合わせることで、マクロな観点から「故郷」を問題にしているのである。

「故郷」の姿を描くに当たって主要な役割を果たしていたのが、北朝鮮からの「帰国船」であった。金時鐘は済州島四・三事件を表現するに際して、航海しない「船」を用いていた。この航海しない「船」は、留まる「意志」を具現化したものとなっていた。そのためこの「船」も、静止と運動という二重性を帯びる形象となっていた。この二重性において船は、現在から過去に向かい再び現在に回帰するという円環を形作っていた。それにより意図されていたのは、歴史的出来事を語りきることの不可能性と、それに伴う出来事の再事件化であった。すなわち証言することの不可能性が、逆説的に歴史を言語から逃れていく「場面」として顕現させることになっていたのである。そのため航海しない「船」は、歴史に向かい何度でも向かう「意志」を示す形象となっていた。

「みみず」の変身には、「道」の規制力を無化する横断可能性と、環境に適合してしまう危険性があった。金時鐘が描き出したのは、「道」を横断する可能性の方であるが、それは「環形運動」としてイメージ化されていた。「環形運動」とは、みみず - 蛹 - 唾蟬等への変身を通じて、徐々に「道」を変質させていくことであった。そのイメージには、日本語を「まるごと」異化していく行為が重ね合わせられていた。さらにそれは歴史の開示に向けた運動ともなっており、「環形運動」は〈道〉のイメージとなっていた。この「環形運動」は、『新潟』最終行における海の上を歩く「男」の姿に繋がっていた。そこから浮かび上がる、『新潟』のリズムとは、歩くスピードとその歩みのサイクルに歴史を凝縮させていく、時間を重層化する構造のことであったのである。

以上が本研究の内容の整理である。これを踏まえて金時鐘の言う「垢じまない抒情」について論じた。

既に述べたように、明治期のリズム概念の受容過程で、新たな形式が探求され、詩の本質としての「内面」が自立的に浮上した。しかし両者は日清戦争という時代的背景の

もと、ナショナリスティックに再編制されていったため、個人の感情を表現した詩に見えたとしても、心情の源泉にはナショナリズムが入り込んでいた。のみならず戦時期に見られたように、文学作品に現れる「桜」を、散華的な思想を支える形象として編制したように、抒情は国家権力と共犯関係を結びうるものである。そのように心情に入り込むナショナリズムと、特定のイデオロギーにあわせて詩的言語を整理することは、心的な価値秩序を内側と外側から再編することである。

「垢じまない抒情」とは、『新潟』の枠組みからすれば、「あるがまま」に情感を歌うことから「意志」的に距離を取り、また「変身」によって日本語を内側から変質させることで、既存の心的な価値秩序には拠らない抒情的な表現を紡ぎ出すことである。つまり特定のイデオロギーに合わせた恣意的な利用に逆らうような、あるいは反復されても自らを失うことのない固有な感情とその表現、それが「垢じまない抒情」である。その固有さにおいて「垢じまない抒情」は、日本的な感性の空間に拮抗し続けるものとなるものであると結論付けた。

3. 本研究の構成

最後に本研究の構成について述べておきたい。

第一章では、金時鐘が、少年時代にどのように日本的抒情を身につけることになったのかを、自伝的なエッセーである「日本語の石笛」を主要なテキストにして論じている。「朧月夜」や「夕焼け小焼け」といった馴染み深い唱歌や、「桜」をモチーフにした短歌や近代詩を中心に、それらが金時鐘の心的秩序にどのように作用したのかを考察した。そして本研究が最終的に答えることになる、「垢じまない抒情」について触れた。

第二章では、第一に、本研究の柱の一つである、明治二〇年代の「リズム」概念受容の過程を追いかけた。第二に、その過程で浮上することになる「抒情」について扱った。そして第三に、「リズム」と「抒情」がナショナリスティックに編制され理論化されていく姿を論じた。なおこの章では、時代的にズレはするが思想的に連続すると考えられる、時枝誠記のリズム論についても検討した。それは明治二〇年代に形成される日本的抒情を論じるための補助線となっている。

第三章では、金時鐘が少年時代に強い影響を受けた、金素雲訳『乳色の雲』（河出書房、一九四〇年。現在の『朝鮮詩集』の前身）を取上げた。そして島崎藤村や佐藤春夫らにノスタルジーとともに日本的な詩情の優越性を感じさせた、金素雲の翻訳法の問題点を、原詩との比較を通じて明らかにした。さらに近年なされた金時鐘『再訳 朝鮮詩集』（岩波書店、二〇〇七年）との比較を通じて、彼が影響を受けた抒情の質を浮かび上がらせるとともに、金時鐘訳の独自性についても言及した。彼の翻訳の特徴の一つに、「意志」の強調があり、それは『新潟』と強い関連性があるものであった。

第四章では、金時鐘が日本的抒情から距離を取り、対象化することを可能にした、小

野十三郎『詩論』を取上げ、その中心的な命題である「リズムとは批評である」についての解釈を示した。小野のその命題を、金時鐘は独創的な形で継承することになる。そのためその継承の仕方を論じるとともに、そこから生じる小野と金時鐘との差異についても言及した。それは認識における距離観の差異として論じた。

第五章では、『新潟』以前の詩集である『地平線』と『日本風土記』を取上げ、出版当時の時代背景を踏まえつつ、二つの詩集に共通する表現上の特徴を論じた。両詩集に共通することは、作品における語り手と対象の間の距離が、多様な角度から表現されることになっても、埋められることなく維持されているという点にあった。そのため語り手と対象は絡み合うことがほぼ無い状態となっている。そしてそれが『新潟』との大きな差異となっていた。

第六章から『新潟』の解釈を行っている。この章では、『新潟』の主題を象徴的に示す「道」について検討し、さらにそれと深く関連する「変身」を分析した。そして「変身」という方法論が、日本と朝鮮のはざまにおかれた語り手の実存の在り方に関わるだけでなく、言語の問題でもあることを明らかにした。

第七章では、『新潟』が一貫して模索し続ける「意志」について検討した。そしてこの「意志」は、既存の価値体系から逸脱することと、その場に留まり続けるという二つの要素から構成されることを明らかにした。そしてこの「意志」が発揮されることで、後に「日本語への報復」と呼ばれることになる言語思想を導き、また焦点が自己に特化されながらも、逆説的に自らを取り巻く世界の姿を開示してしまうということを論じた。

第八章では、六、七章で論じた「変身」と「意志」をもとに、それらを通じて『新潟』において「故郷」と歴史的出来事がどのように現象することになるかを分析した。『新潟』が対象とする歴史的出来事については、六、七章では帰国運動や吹田・枚方事件等が扱われるが、ここでは主に金時鐘の核ともいえる一九四八年の済州島四・三事件を取上げた。

結論では、本論の整理をするとともに、結論として金時鐘の言う「垢じまない抒情」とはなにかを述べた。そして残された課題を論じた。

以上。